台湾で出会った未来の自分

「働く」が変わる瞬間

「将来、何になりたい？」

この問いに、はっきりと答えられる学生は少ないかもしれない。将来の進路に悩む学生にとって、「働く」とは何か、「自分らしい生き方」とは何かを考える機会はそう多くない。そんな中、私達は台湾の EY を訪問し、海外で活躍されている日本人公認会計士の方々と直接対話する貴重な機会を得た。

台湾で出会った「海外で働く日本人公認会計士」の方々との対話は、私達の迷いに光を灯してくれた。異国の地でプロフェッショナルとして働く彼らの姿はかっこいいだけでなく、私たちがこれまで抱いていた「仕事」へのイメージを大きく揺さぶった。言語や文化の壁を越えて築かれる信頼、グローバルな視点でのキャリア形成、そして何よりも「自分らしく働く」ということの意味の一つひとつが、これからの人生を歩む私達にとって大きなヒントとなった。

この記事では、台湾で出会ったプロフェッショナルの言葉や姿勢を通して、我々学生が未来に向かってどう歩み出すべきかを考える。小さな一歩が、大きな気づきにつながることを、私たちはこのプログラムで痛感した。言葉の壁、文化の違い、そして自分自身――そのすべてを乗り越えて、今の場所に立っていらっしゃる。私達はそんなリアルな話を拝聴して、「働くって、もっと自由で、もっと自分らしくていいんだ！」と気づかされた。

EY 台中「支社長」陳明宏さんのキャリアと学び

今回、私たちは台湾・台中にある世界的会計事務所 EY を訪問し、２０年以上勤務し現在は支社長を務める陳明宏先生にお話を伺う機会を得た。初めてお会いした際、若々しい雰囲気とエネルギーにあふれた姿に、「本当に支社長なのだろうか」と思わず心の中でつぶやいてしまったほどだ。

まず公認会計士を志した経緯を尋ねると、日本と台湾の制度や常識の違いが印象的だった。日本では資格取得後に就職するケースが多いが、台湾では働きながら資格を取ることも一般的だという。陳さん自身も大学卒業後に MBA へ進学しながら EY で仕事を始め、正式入社後わずか一年で公認会計士試験に合格された。努力を積み重ねながら着実にキャリアを築かれた姿勢に、私たち学生は大きな刺激を受けた。

さらに、公認会計士は台湾でも日本と同様に三大国家資格の一つで、「仕事を進めるうえでは日本人の丁寧さと台湾人の率直さを状況によって使い分ける柔軟さが欠かせない」と語られた。国際的な環境で成果を上げるには、文化の違いを理解し、双方の長所を取り入れる姿勢が重要だと感じた。

３つの質問から探る、挑戦と成長のヒント

1. 変化が成長を生む――会計事務所で働く魅力

陳先生は「毎日が変化の連続で、挑戦の積み重ねが自分の成長につながる」と話す。クライアントから寄せられる多様な相談や課題に向き合うことで、知識を深めるだけでなく、新しい視点を学び続けられるのがこの仕事の醍醐味だという。その言葉から、会計事務所の仕事は単なる数字の管理ではなく、日々進化するビジネスの最前線で学び続ける職業であることを強く感じた。

陳先生の前向きな姿勢や変化を楽しむ姿は、これから社会に出る私たち学生にとって大きなヒントだ。環境の変化を恐れず挑戦を続けることで、自分自身を成長させられる――その言葉は、これから歩む人生を考えるうえで強い励ましとなった。

2．苦しみを成長に変える力――陳さんが語る挑戦の美学

陳先生は、試験勉強や困難な状況に直面した際の心構えについて、「苦しいだけで終わらせず、すべてを成長の糧として捉えることが大切だ」と力強く語った。彼にとって、苦戦した経験は単なる苦痛ではなく、自分自身を鍛え高めるための貴重な機会である。失敗や挫折を否定するのではなく、それらを受け入れ、前向きに乗り越えることで人は成長できるという信念が、彼の言葉の端々から感じられた。

実際にその姿勢を貫いてきた陳さんは、「私の顔を見てみなさい。若く保てる秘訣はそこにある」と笑顔で語り、困難を乗り越えてきた自信と誇りをにじませていた。その表情には、過去の苦労を糧にしてきた人間ならではの深みと温かさがあり、聞き手に強い印象を与えた。

3．資格だけでは足りない――多様な経験が人の価値をつくる

学生時代に取り組むべきことについて陳さんは、「会計士の資格など専門知識だけでは人としての価値は高まらない」と指摘した。資格取得は重要だが、それだけに偏ることなくさまざまな経験を積み、多様な人々と交流することが、自身の価値を高めるために不可欠であるという。異なる分野に触れて広い視野を持つことで、社会に出た際に柔軟な思考と対応力を発揮できるようになる。学生のうちに積極的に外の世界と関わり、自分の可能性を広げることが、将来の成長につながると強調された。

台湾出身の支社長である陳先生へのインタビューは、私たちにとって非常に有意義な時間となった。普段お会いできない方であり、今回は日本人公認会計士・橋本先生の通訳を介し対話が実現した。通訳を挟むことでより私たちに理解しやすく、詳しくお話を伺うことができた。私たちにとって非常に貴重な経験ができた。

台湾で活躍する日本人会計士が語る「働き方」と「価値観の違い」

台湾で活躍する日本人会計士、川口先生と橋本先生にお話を伺った。EYでは、海外で働きたいと希望を出しても、語学力などの条件を満たした人だけが駐在員として勤務できる仕組みになっている。

橋本先生は数年間駐在員として勤務した後、籍を台湾EYに移し、現在も現地で活躍している。

お二人が感じる台湾と日本の大きな違いの一つは、物事の表現方法である。「日本人は婉曲で曖昧な言い回しを好むのに対し、台湾人はストレートで明確に伝える傾向が強

い」と橋本先生は語っており、表現スタイルの違いは仕事の進め方にも影響を及ぼすそうだ。また台湾では投資を行う人が圧倒的に多いようで「投資家の税務に関する案件も多く扱っており、企業だけでなく個人業務にも幅広く対応している」と川口先生は話した。

働き方も両国には大きな違いがある。「日本は保守的で意思決定のプロセスに時間がかかるのに対し、台湾ではこのプロセスが速く、形式的な無駄が少ない」と橋本さんは指摘した。もっとも、こうした文化的な違いは衝突を生むこともあり、その際には両者の間に立ち調整役を果たすこともあるという。

会計士として大切にしている姿勢について尋ねると、お二人は「会計の判断には幅があるため決めつけないこと」「自らの成長につながる行動をとること」「クライアントの成長を第一に考えること」「信頼を得られるように動くこと」「俯瞰的な視点を持つこと」を挙げた。これらを心がけながら、日本と台湾の架け橋になりたいと語っている。

振り返り、今後に向けて

今回のPBLを通して、台湾での体験や会計士の方々との交流から三つの大きな学びを得た。

まず一つ目は「言語とコミュニケーション力の大切さ」である。会計士の仕事に必要なのはもちろん、観光や日常生活でもその重要性を強く感じた。実際に話を聞いたもう一人の日本人公認会計士・川口先生も、台湾に来て日が浅く、最も苦労しているのは言語面だと語っていた。異国で働く上で基盤になるのはやはりコミュニケーション力だと改めて実感した。

二つ目は「会計士という職業の持つ力」である。収入や行動力といった目に見える部分だけでなく、自分の考えを明確に言語化する力や、多角的な視点で物事を捉える姿勢に刺激を受けた。特に印象的だったのは人間性だ。高い役職に就いているにもかかわらず、学生である自分たちとも対等に議論を交わし、真剣に向き合ってくれた。その誠実さには驚かされた。

三つ目は「文化の違い」。日本人は計画を緻密に立てて物事を進める傾向がある一方、台湾人は意思決定をスピーディーかつストレートに行う印象を受けた。この違いは今回のテーマの一つである「台湾で働くこと」を考えるうえで欠かせない視点だ。日本で働く場合と台湾で働く場合の大きな違いは、文化の背景にある価値観に表れていると感じた。

今回、1週間台湾に滞在し、日本ではできない多くの経験をすることができた。現地での生活や人々との交流、公認会計士の方々との対話を通して、自分の考え方や物事の捉え方に新しい視点が加わり、台湾に行く前と比べて大きく視野が広がったと感じている。文化の違いやコミュニケーションの大切さを実感したことは、自分の将来を考えるうえで大きな財産となった。今回得た学びを無駄にせず、今後の進路や社会での活動に活かしていきたい。

（チーム龍：尾崎勇太・鳴神遥・松阪勇之介・水口夕舞・山本光）